

宰府画報

第18号

2023年5月
(令和5年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

太宰府の絵師展 「吉嗣家交友録」

を開催します

第3回目の特別展

本紙で毎号お知らせしている絵師調査事業の成果や進捗状況を、実物の展示とともにひろく知っていただくために開催している太宰府の絵師展。これまで「齋藤秋圃」(2018年)、「秋圃と拜山」(2021年)と2度の展覧会を行い、このたび第3回展として、6月10日(土)から7月17日(月・祝)まで「吉嗣家交友録」近代文人の書と絵画を開催することとなりました。

吉嗣家には、梅仙、拜山、鼓山の三代の作品とともに、明治から昭和前半に活躍した様々な文人の書画が現存しています。本展はこの中から厳選した約50件の資料によって、文人たちの筆と営みと吉嗣家の幅広い交友関係を概観しようとするものです。

交友のたしかな証

文人の書画というと、どれも似たような中国風の山水画、読めないくずし字、難解な漢詩といったイメージが付きものです。たしかにそのような側面もあり、内容を正確に理解することは簡単だとは言えませんが、一部でも文字が読めたり、関連資料を参照したりすることで、概要を把握することができる場合があります。



図1 《骨筆題詠》紙本墨書・墨画 明治11年(1878) 吉嗣家資料

たとえば図1の《骨筆題詠》は、拜山が明治11年(1878)に清国に遊学した際に現地の文人たち16名が揮毫した書画卷です。巻頭の骨筆図は当代きつての画家として知られた胡公寿、左手で筆を掲げる姿を描いた拜山の肖像画は、画僧竹禅によるものです。落款には書写した日付や上海という地名なども記されていて、清国での拜山の足跡を確認することができます。

また、図2の《諸画貼交屏風》は、明治19年(1886)



図2 《諸画貼交屏風》紙本着色 明治19年(1886) 吉嗣家資料

筑前を中心とした23名が書画を寄せる作品です。この祝賀会の内容を記した目錄「梅仙先生古稀筵展観録」には、本作を含め170点以上の寄贈作品が列記されていますが、この6割に及ぶ1000点が現存していることが、今回の調査によって明らかになりました。実作品からは、タイトルのみを記す目録からだけでは知り得ない多くの情報が見られ、古稀祝賀会の実態解明、吉嗣家の歴史、さらにひろく文人研究にも役立つことが期待されます。

骨筆を特別公開

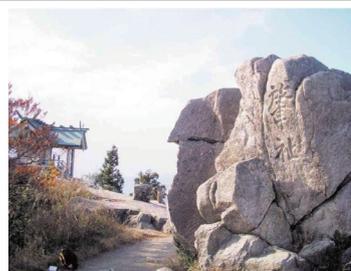
本展の開催を記念して、拜山とともに海を渡った「骨筆」を特別展示します(骨筆については本紙裏面の「逸品探訪」をご参照ください)。逆境を跳ね返して名を成した、「不屈の象徴」たる存在を、ぜひ間近でご覧いただければと思います。(井形栄子)

メイショ メイブツ

宝満山山頂には、竈門神社の上宮が鎮座しています。その社殿のそばにある巨石に「肇社」と刻まれています。吉嗣拜山の揮毫によるものです。息子鼓山が編集した遺稿集『古香書屋詩存』巻二に、「(大正二年)五月九日登竈門山絶頂、有巨巖、刻肇社二字(五月九日、竈門山絶頂に登る、巨巖有り、肇社の二字を刻む)」と題する漢詩があることから、大正2年(1913)5月に揮毫がなされたことがわかります。

さて、「肇社」は、絵師調査チームの井形栄子さんのご教示によれば、「墨場必携」という、書家が文字を選ぶ際の名句をまとめた書物にみえる語です。新たに幸いが始まる時との意味ですが、他にも太宰府最初の寺社の跡地という解釈、初代神武天皇の生母とされる玉依姫を祀る場所などの解釈がなされています。

宝満山は平成25年(2013)年10月17日の官報告示により国史跡に指定されました。山中には祭祀跡、堂舎跡、窟、坊跡などが良好な状態で遺されていることから、山岳信仰のあり方を考えるうえで重要とされています。今年はこの史跡指定から十年という節目の年にあたります。この機会に、宝満山登山をされてみてはいかがでしょうか。



竈門神社上宮の「肇社」の岩
写真提供：
太宰府市文化ふれあい館
満山登山をされてみては
いかがでしょう
か。
(重松敏彦)

逸品探訪

大宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介しします

【**拜山の骨筆**】

はいざん こっびつ
26歳で起こった悲劇
明治4年（1871）7月9日。東京へ

出て太政官記録編集局という政府の機関に勤務していた拜山は、出勤の途中、大風で倒壊してきた家屋の下敷きとなる事故に見舞われました。病院に運ばれた拜山は瀕死の状態、一命を取り留めるため、重傷を負った右腕を切断することとなりました。手術は功を奏して、蘇った拜山でしたが、職務に支障のある身となった拜山はやむなく官職を辞して、詩書画の道に進むことを決意しました。

前腕の尺骨で製作

拜山の骨筆は、肘から手首にかけての前腕部分にある2本の骨のうち、内側（小指側）にある尺骨で作られています。幸いここは折れていなかったらしく、拜山は事故後の翌年にこの骨筆を作りました。持ち手部分には、拜山が東京で懇意にしていた漢学者・亀谷省軒の漢詩が篆書体で刻まれ、贅の末尾には「壬申初冬」「雪齋迂人」の刻字があつて、



拜山の骨筆



（翻刻）
辛未七月九日風雨大烈
拜山犯之而
朝偶為顔屋見匠医截其
右腕而蘇今取其骨以為
筆管
（辛未七月九日風雨大烈に烈しく、拜山之を犯して朝するに、偶たま顔屋の為に匠をせらる。医其の右腕を截り、而して蘇る。今其の骨を取りて以て筆管と為す）

明治5年に雪齋が彫刻したことがわかります。雪齋なる人物について、また骨筆作製の具体的な手順などは現時点では不明ですが、吉嗣家の未調査資料などに情報がのこされている可能性もあります。

切っても切れない相棒

南画家として生まれ変わった拜山は、この骨を携えて全国各地を巡り、明治11年（1878）の清国渡航の際も旅をともにしました。まさに一心同体の相棒です。骨で作ったという少しギョツとするかもしれませんが、綺麗に磨き整えられた骨筆は、実際に見るとなかなか美しく、目にした多くの文人たちは絵に描き、詩に詠んでこれたたえています。

拜山はまたこの骨筆を実際に使つて揮毫することもありました。左写真の《骨筆に菊図》は、骨筆の誕生40年を記念して作られたもので、画賛の文中には「以骨筆作此図（骨筆を以て此の図を作る）」と記されています。

（井形栄子）



《骨筆と菊図》紙本墨画 掛幅装
大正元年（1912） 吉嗣家資料

いちまい
賞 鑑 稿 画
吉嗣家資料

【**芦に白鷺図**】

勢いよくのびた芦を背景に、白い水鳥が佇んでいます。首をすくめ、片脚を屈していますから、しばし休息しているのでしょうか。鳥の体部と翼の先端は淡墨線でおおまかな輪郭をえがいています。羽の白さは、輪郭線の内側に白色の



絹本墨画 縦 42.1 × 横 27.7cm

絵具を塗っているためではなく、その外側にうすい淡墨を施しているからです。喙と脚をあらわす濃墨線も、羽の純白

を強調しています。

画面右の墨書から、この画稿の原画は、中国清朝中期の画家李鱣の作とわかります。李鱣は名家に生まれた官吏でしたが失脚し、晩年は揚州に住まい、作画によって糊口を凌ぎました。揚州は水運の要衝で、江南随一の商業都市でした。その経済的発展は、学芸の興隆を齎しました。この地では多くの書画家も活躍しましたが、なかでもとりわけ個性的な創作をおこなった画家たちを揚州八怪と称します。李鱣もそのひとりです。

吉嗣家に伝わる画稿には、李鱣画の写しが多数ふくまれます。官吏としての栄達を願いながらもそれが叶わなかった李鱣に、拜山は格別の親近感を覚えていたかもしれません。

参考文献『揚州八怪』大阪市立美術館（小林法子）

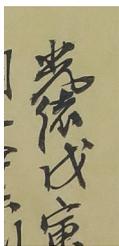
昌績という人物が拜山に宛てた手紙です。拜山との詳細な関係は不明ですが、清国滞在中に拜山は汪昌績から詩の校正を依頼されるなど交流があつたようです。

元号はもともと中国を中心とする東洋の漢字文化圏で広まり、当時は清国だけでなく朝鮮なども独自の元号を使用していました。吉嗣家資料からは、他にも朝鮮・大韓帝国の元号「光武」（1897～1907）が使用された資料も見つかっています。（木村純也）

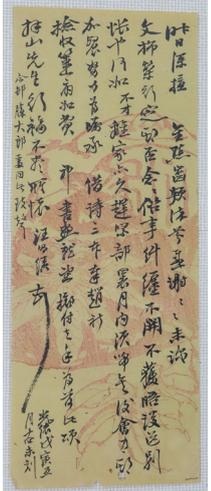
ひとこと
くずし字

【**光緒**】

吉嗣拜山は明治11年（1878）2月に清国へ渡航し、現地の文人や滞在していた日本人と交流し同年6月に帰国します。この時制作された作品のうち、特に清国の文人から贈られたものには「光緒」という文字が見られます。



「光緒」は清国の第11代皇帝光緒帝の時代の元号で、1875～1908年に使用されました。くずし方を見ると、「光」はくずれているものの原型を留めており、「緒」は糸篇が一本の縦線に、「者」は「衣」のように見えます。一筆箋ほどの紙片にかかれたこの資料は汪



汪昌績《詩書》 明治11年（1878） 吉嗣家資料